

国際貢献で培われた力をいざ、京都で



# 京都編

日本も元気にする  
青年海外協力隊



青年海外協力隊

検索

<http://www.jica.go.jp/volunteer>

独立行政法人 国際協力機構(JICA) 関西国際センター

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

Tel:078-261-0341(代) Fax:078-261-0357

世界を  
元気にした人は、  
日本も  
元気にできる!

# その経験を京都で活かす

日本では得ることができない体験を求めて、  
国境を越えた8人の青年海外協力隊員たち。  
彼・彼女らはいま、この京都で、  
新しい一步を踏み出している。  
青年海外協力隊での経験を原点として。

地球の裏側のまちにも、この日本の古都にも、  
解決すべき課題があり、支えを求める人々がいる。  
だから8人の協力隊OB・OGたちは、  
今もそれぞれの現場で走り、悩み、汗をかき続ける。  
彼・彼女たちの協力隊から始まるストーリー。  
世界へ羽ばたく夢を心に秘めたあなたに届きますように。



## その経験を 日本の未来へつなげる



企業と企業の架け橋となって、  
日本の産業をもっと元気に。

藤本 梨沙さん

赴任地  
エルサルバドル 

京都府相楽郡  
ゼネラルプロダクション株式会社



創業160年の歴史を持つ  
京都の老舗料亭の活性化に成功。

野口 拓勇さん

赴任地  
タンザニア 

京都市左京区  
下鴨茶寮 取締役



行政の力で、京都市の  
障害施策の充実に挑む。

瀬川 裕さん

赴任地  
エチオピア 

京都市中京区  
京都市 保健福祉局 障害保健福祉推進室



途上国の人々と心ひとつに  
今も道をつくり続ける。

酒井 樹里さん

赴任地  
ウガンダ 

京都市下京区  
NPO法人 道普請人(みちぶしんびと)  
事業管理責任者(アジア・アフリカ地域)



生徒たちが世界に目を向け、  
幅広い視野で未来に臨めるように。

福岡 孝一さん

赴任地  
ベリーズ 

京都市西京区  
京都市立椋原中学校 教諭



市民に寄り添い、地域課題を  
解決するアドバイザーとして奔走。

亀村 佳都さん

赴任地  
ニカラグア 

京都市中京区  
京都市 文化市民局 地域自治推進室  
まちづくりアドバイザー



女性が輝く京都の地域支援のため  
中小企業診断士としてできることを。

阪本 純子さん

赴任地  
ケニア 

京都市北区  
中小企業診断士



高齢者のみなさんがいつまでも  
元気に暮らせる亀岡を目指して。

吉田 司さん

赴任地  
ブータン 

京都府亀岡市  
亀岡市 健康福祉部 高齢福祉課

# 企業と企業の架け橋となって、日本の産業をもっと元気に。

藤本梨沙  
RISA FUJIMOTO

赴任地  
エルサルバドル

赴任地での職種(活動分野)  
環境教育

京都府相楽郡  
ゼネラルプロダクション  
株式会社

学生時代から環境問題に興味を持ち、卒業後すぐに青年海外協力隊に応募。エルサルバドルではゴミのポイ捨て防止などの環境教育に携わる。帰国後、ゼネラルプロダクション株式会社の立ち上げに参加し、現在も同社のマーケティングマネージャーとして活躍中。

## 中小企業の活性化のために、わたしができること。

日本の製造業は中小企業の高い技術力によって支えられてきた。しかし、各企業それぞれが孤立していることで、一貫したものづくりができないことが大きな課題だ。「青年海外協力隊の赴任先だったエルサルバドルから、生まれ育った東大阪市に戻ると、なんとなく活気がなくなったように感じました」。藤本梨沙さんは、多くの工場が廃業し、寂しくなってしまった街を元気づけるために何ができるのかを考えた。そして、ある考えがひらめく。

「街を元気にするには経済の活性化しかない!」

思いついたら、もう止まらなかった。企業経営者が集まる中小企業振興のためのセミナーに積極的に参加。自分の力を活かせる場所を探し求めていたとき、出会ったのが石崎義公社長だった。

「中小企業をつなぐネットワークをつくることで、ものづくりの全工程を構成する。そんな具体的なビジネスモデルを示されていたのが、石崎社長でした。自分のやりたいことはこれだと確信しました」。

藤本さんは石崎社長に自分の思いのすべてをぶつけた。

そして2010年、ゼネラルプロダクション株式会社が誕生する。

ゼロからのスタート。  
でもやってみるしかない。



藤本さんにはそれまでに社会人経験がなく、漕ぎ出した会社もまったく新しいビジネスモデルを目指す企業。不安はなかったのだろうか?

「エルサルバドルでの目標は『ゴミのポイ捨て防止』の啓発から、街の衛生全体に対する環境教育を行うことでした。でも現地に着いてまず驚いたのは、街にゴミ箱そのものが存在しなかったことです(笑)。最初に取り掛かったのが、ゴミ箱を設置していくことです」。現地でもまさにゼロからのスタートだった。

「とにかく、やってみるしかない。そこに何もなければ、自分で作っていくしかない。そんな状況に身を置いたことで、常に前向きに行動し、試行錯誤を繰り返しながら物事に挑む姿勢を身につけることができました」。



自社システムで開発したLED植物栽培装置の前で。



## 今度は、高齢化が進む農業の現場のために。

現在は主に、自社のビジネスシステムで製作したLED植物栽培装置の営業とマーケティングに携わり、栽培指導のためにはどんな所にも出向くという。

「高齢化社会のなか、まだまだ農業に携わりたいと願う高齢の農家の方々に希望を持ってもらえたらと思っています」。人のために前例のない分野へ飛び込み、進み続ける。それが藤本さんのやり方だ。



前向きなパワーと積極性、そしてこの笑顔で課題に挑み続ける。

上司に聞く!



ゼネラルプロダクション株式会社 代表取締役 石崎 義公さん

中小企業振興に対する彼女の熱意に触れたことが、当社を立ち上げるきっかけとなりました。非常に粘り強く、バイタリティに溢れる藤本さん。企業の代表者や官公庁の人々に対して、少しも怯まずに交渉できるアグレッシブな姿勢は、やはり協力隊の経験から培われたものなのだと思います。

## 考えを押し付けるのではなく、まず自分が相手を理解すること。

藤本さんが環境教育のために訪れたエルサルバドルには、「ゴミのポイ捨てはいけないこと」という考えそのものがなく、初めは途方に暮れてしまったこともあったという。時には現地スタッフに声を荒げてしまうことも。しかし、「リサはどうしていつもそんなに怒っているの?」と言われたことから、自分の考えを押し付けようとしていたこれまでの自分を反省。

ドラム缶にペイントを施したゴミ箱を公園に設置したり、講演やワークショップを開催したり、地元のラジオやテレビに出演して啓発活動を行うなど積極的な活動を進めていくうちに、現地の人々が暮らしている生活環境や、人々の考え方を理解で

きるようになっていた。

「人々の考えを理解するためにこれまで以上に積極的に人々と接するようになってから、楽しみながら活動に取り組めるようになりました」と藤本さんは語る。



これがエルサルバドルの街のゴミ事情。



ゴミのポイ捨て防止キャンペーンのためにオリジナルソングも作成。

## 青年海外協力隊を目指すみなさんへ 現地の価値観に触れることで 見えてくることがあります。

協力隊の活動は決して最初から思い通りにいくものではなく、誰もが最初はひどく落ち込まれます。でも、現地の価値観に触れることで、真剣に悩んでいた物事がそれほどたいしたことじゃないと思えるようになるかも知れない。現地の人々と思いを一つにすることで、はじめて自分の能力を存分に発揮できると思います。

# 創業160年の歴史を持つ 京都の老舗料亭の活性化に成功。

**野口拓勇**  
TAKUYU NOGUCHI

赴任地  
**タンザニア**

赴任地での職種(活動分野)  
**土木施工**

京都市左京区  
**下鴨茶寮 取締役**

商社在職時に取得した一級施工管理士資格を活かし土木施工管理者としてタンザニアに赴任。帰国後、さまざまなホテルやレストランの再生事業に携わった手腕を株式会社オレンジ・アンド・パートナーズに認められ、現在は同社取締役として下鴨茶寮の活性化に勤しむ。

## 伝統と格式の街、京都にひとり乗り込んで。

京都市左京区。下鴨神社にほど近い閑静な住宅地に、160年の歴史を誇る料亭「下鴨茶寮」はある。株式会社オレンジ・アンド・パートナーズの代表、小山薫堂氏の発案を受け、同社取締役の野口拓勇さんがこの下鴨茶寮の活性化に乗り出したのは2012年のことだ。「確かにこれまで、会社の事業として数々のホテルやレストランの再生・活性化事業に取り組んできました。しかし今度任されたのは、伝統と格式を重んじる京都の老舗料亭。さらにわたしは東京からやってきたまったくのよそ者。さすがにプレッシャーを感じましたよ」。

しかし野口さんならできると経営陣は判断した。「君はアフリカにいた人材だ。どんな環境でも成果をだせるはずだ」。そんな熱い激励を受け、野口さんは京都の街へ向かった。「思っていたとおり…というか思っていた以上に、代々この料亭を支えてきた女将をはじめ、従業員のみなさんに受け入れられるまでは大変でした(笑)」しかし、野口さんはこの料亭に飛び込み、独自の手腕で活性化を果たす。小山代表の目は、正しかった。

## 自分が求められる環境を自ら作り出すということ。

青年海外協力隊で訪れたタンザニアでは、土木施工隊員として道路、水路、橋梁などの施工管理に携わった。しかし着任当時は予算の不足や現地行政の不手際などが重なり、ほとんど仕事に取り掛かれない状況が続いたという。「『ひょっとして、自分は必要とされていないのでは?』と悩んだこともありました」。しかし、そこでめげる野口さんではなかった。「ふと気づいたんです。充実した環境を求めただけではなく、自分が環境に何かを与えるを考えなければ」と。

そこで野口さんはHIVに感染した現地の女性たちが、仕事をもらえないでいる状況に着目し、日本から寄付を募り、彼女たちの仕事先となる養鶏所の設置に尽力した。結果、彼女たちに仕事と生きがいをもたらすことができた。



いつも従業員のみなさんに気軽に話しかける野口さん。



下鴨茶寮は2016年、東京・銀座にも出店される。

## 「変える」よりも「変わる」のを待つ。

「目標を達成するためには、人々の共感を集めることが大切です」と語る野口さん。下鴨茶寮の活性化事業では「どこまでも、従来までのやり方と伝統を重んじる」という方針でゆったりと従業員たちの心を掴みながら溶け込んでいった。一人のリストラも、降格も出さない。それが野口さんの定めた活性化のルールだ。「無理に変えず、自然と変わっていくように導いていく…これも“活性化”です」。

同僚に聞く!



下鴨茶寮 料亭部 料理長 **明石 尚宏**さん

いつもわたしたち従業員の目線に立ち、真剣に意見を聞き、議論してくれる野口さんの姿勢のおかげで、料亭全体の風通しがとてもよくなったと思います。時に意見を戦わせることもありますが(笑)、下鴨茶寮をさらに発展させるため、お互いに力を合わせて取り組んでいきたいと思っています。

## 「必要とされる人間になる」そのために努力することの大切さを知った。

「海外で働いた経験がある、と言ってもアフリカで働いた経験を持つ人間なんて、そういないでしょう?」。野口さんがタンザニアを赴任先として希望したのは、「自分の価値にプラスアルファをつけたい」という強い思いだった。しかし、現地では肝心のインフラ整備作業が遅々として進まず、無為の日々が続いた。

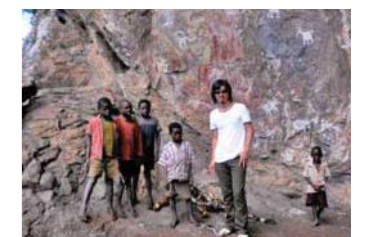
「苛立ちが募って現地スタッフと衝突したこともありました。でも、本当に人から必要とされるためには、自分から必要とされる人間になろうとする努力が大切だと気付いたんです」。

衝突したスタッフは野口さんが帰国するとき、寂しくなると泣いてくれた。

「2年間の赴任期間は、今のわたしの大切な財産です。だから今も必要とされている自分に自信を持つことができているのだと思います」。



タンザニアのビールはおいしく、野口さんのお気に入りとなった。



地元の子供たちと一緒に記念撮影。

## 青年海外協力隊を目指すみなさんへ 決して気負うことなく、「人生の有給休暇として」活動を楽しむ。

協力隊員として過ごす2年間は、いわば人生の「有給休暇」。決して気負う必要はありません。この期間を有効に活かすために、精一杯奮闘してください。わたしはタンザニアで、どんな過酷な環境にも挑戦することの素地を得ることができました。現地で得た経験は、きっとあなたの人生を豊かにしてくれます。

# 行政の力で、京都市の 障害施策の充実に挑む。

**瀬川 裕**  
HIROSHI SEGAWA

赴任地  
 **エチオピア**  
 赴任地での職種(活動分野)  
**PCインストラクター**

京都市中京区  
**京都市 保健福祉局  
 障害保健福祉推進室**

システムエンジニアとして商社に勤務後、  
 青年海外協力隊に参加。エチオピアの首都  
 アディスアベバの学校で情報教育教師として  
 活動する。帰国後、京都市の協力隊経験者枠を  
 利用して京都市役所に採用され、  
 障害者施設の整備に携わっている。

## 民間の力だけでは解決できない問題がある。

瀬川裕さんは青年海外協力隊としてエチオピアで活動した後、京都市役所の障害保健福祉推進室に所属し、3年目を迎えた。

「障害者施設の整備や耐震化・防火対策等について、事業者や国、市の各部署との調整を行うことが主な仕事です」。

瀬川さんが行政の仕事に携わろうと思った理由には、青年海外協力隊の活動を通して受けた印象が強く影響している。

「現地では高校生を対象にパソコンの操作を教えていたのですが、彼らがその技術を活かすための就職先がきわめて少ないことを実

感しました。こうした問題を解決するためには、やはり民間の力だけではなく行政の力が必要だ、と考えたことが大きかったですね」。

社会の課題に挑むために、民間企業の力に頼るだけでは限界がある。その問題意識が、行政職に瀬川さんを引き寄せた。

「上司や同僚、他部署の方々、できるだけ多くの人の意見を取り入れて仕事を進めていくことを心がけています。これはエチオピアでの活動で、1人で抱え込まずに現地の職員を巻き込みながら、仕事に取り組んできた経験から掴んだやり方です」。

## まず、パソコン操作の 楽しさを知ってもらうこと。

エチオピアでは16~18歳、高校生クラスの生徒たちを受け持った。「ほとんどがパソコンの電源の付け方も知らない生徒たちばかり。最初は興味を示してくれない生徒もいましたが、わたしが日本でSEとして働いていたときの月収を現地の金額に換算して黒板に書きだすと、生徒たちの目が輝きました(笑)」。

やる気を引き出された生徒たちは徐々にパソコンの操作に慣れていった。放課後も学びたい生徒たちのために、パソコンラボを開放。熱心な生徒たちは時間を忘れて練習に励んでいたという。学年が変わる時期に、瀬川さんの担当していたクラスを他の教員が受け持つことになり、生徒からは「新しい先生には悪いけど、今の授業はつまらない。セガワ先生の授業のほうが楽しかった」と言われた。



他部署との連携を図りながら業務に動かし瀬川さん。



京都市役所には青年海外協力隊OB・OGが多数勤務している。

## 長期的視点をもって、 結果を出すことの大切さ。

「授業からパソコンに興味を持った生徒たちがわたしの帰国後も学び続け、最終的にその技術を職業に活かすことができたらいい、と考えていました」。この発想は、現職にも通じている。「行政の仕事は1日で結果が出るものではなく、長い期間をかけてようやく成果が現れます。昨年、ある障害者施設の設置に携わったのですが、新聞で利用者さんの感謝の声を読み、心からやりがいを感しました」。

上司に  
聞く!



京都市 保健福祉局  
 障害保健福祉推進室 施設福祉課長 **近藤 恵さん**

瀬川さんは実に行動力がある人材。障害保健福祉はとても課題の多い仕事ですが、彼は業務をこなしながら、外国人観光客誘致のワーキングチームや庁内の英語講座に参加するなど積極的に活動しています。今後もさまざまな経験を積み、幅広い視野を培ってほしいと思います。

## 授業に工夫を重ねながら、 現地の同僚との信頼関係を築く。

エチオピアでの授業では、生徒たちの興味を引き出すために試行錯誤を繰り返したという瀬川さん。「グループワークを取り入れたり、ハードの説明に動画を活用したりと、工夫を重ねて進めていきました」。

機材は揃っているのに、現地職員たちがウイルス対策に対してほとんど注意を払っていなかったことに驚かされた。また、ハードの修理に関して手を焼いたことも。

「修理担当者が『修理は自分の仕事!』とこだわり、なかなかわたしに関わらせてくれないんです(笑)」。

しかし、任務に対する自分の焦りが、その職員との間に軋轢を生んでいたことに

瀬川さんは気づいた。「仕事の話をする前に同僚と十分コミュニケーションをとり、信頼関係を築くことの大切さを知りました」。



白衣を着た現地の同僚たちとともに。女性も多く働く現場だった。



“セガワ先生”の授業を熱心に聞く生徒たち。

## 青年海外協力隊を目指すみなさんへ 日本以外に、心から応援したい 国がきっとひとつ増えます。

2年間の活動で、幅広い視野や価値観の違いを学ぶことができました。また赴任先の暮らしの素晴らしさを感じながら、世界のなかの日本のよさも感じることもできましたね。興味があればぜひ挑戦してください。2020年の東京オリンピックで、心から応援できる国が日本以外にきっとひとつ増えますよ。

# 途上国の人々と心ひとつに 今も道をつくり続ける。

酒井 樹里  
JURI SAKAI

赴任地

 **ウガンダ**

赴任地での職種(活動分野)  
**村落開発普及員**

京都市下京区 みちがしんびと  
**NPO法人 道普請人**  
事業管理責任者(アジア・アフリカ地域)

5年間勤務した雑貨メーカーを退職後、JICA関西の展示に足を運んだ際に協力隊OGの話に感銘を受け、応募を決意。ウガンダへ村落開発普及員として赴任中、現職のNPO法人理事長に出会い、その場でスカウトを受ける。現在も途上国の開発援助に尽力している。

## 専門知識よりも、情熱とコミュニケーションの力。

日本では道路が平らなのはあたりまえの話。しかし途上国ではそうはいかない。でこぼこの道、大きく穴が開いた道、ぬかるみの道…こうした悪路が途上国の人々の生活や産業の発展を阻んでいる。

「青年海外協力隊ではウガンダのジロブウェという地域で、ネリカ米というお米の普及活動にあたっていました。収穫したお米を脱穀機のある施設まで運ぶための道の状態がとてもひどかったことから、土木施工管理者として現地に赴任していた協力隊員と協力して、土のうを敷き詰めることで道を直していったんです」。

その噂を聞きつけて現地にやってきたのが、NPO法人 道普請人理事長で、京都大学大学院でも教鞭を執る木村亮氏だった。

「活動にあたって自分には何の専門知識もない…ということが不安だったのですが、知識がないならいい、わからないことは専門家に話を聞けばいい。そう思って前向きに取り組んでいました」。

土のうの並べ方について木村理事長から直接指導を受けた酒井さん。その熱心な姿勢が理事長の心を動かし、作業1日目で「帰国したらうちの法人の正職員として働かないか」と声を掛けられた。

## 自分たちの道は、 自分たちで直す。



帰国後すぐ、同法人の事業管理責任者として採用され5年。現在も酒井さんは、年の三分二をアフリカなどの途上国で過ごし、さまざまな国の道を土のうで直す事業計画のマネジメントに携わっている。「土のうを使った道直しはとても簡単で、現地の人々がすぐ覚えられることが利点。あとは、人々が自分たちの生活や産業の発展のために、自分たちが道を直しているという意識を持って働いていけるよう、サポートを行っていくことがわたしたちの役目です」と語る酒井さん。

決して、一方的に工法を教えるだけではない。現地の人とともに働くことで、自分たちも励まされる。何よりも、人々が自分たちのために道を作っていく過程を間近で見ることができるのが、このNPO法人の活動における醍醐味だという。



海外での活動に加え、オフィスでもエネルギーに活躍する。

## 世界のどこにあっても、 自分と他人の間に線を引かない。

「自分と他人の間に“線”を引かないこと」。これは、酒井さんが青年海外協力隊で身につけたポリシーだという。「違う文化圏で暮らしていても、結局は人間同士。自分がしてほしいことを相手にすれば、人は喜んでくれます。また自分がイヤなことは相手にもしない。あたりまえのことなんですけどね」。酒井さんは今、ミャンマーでの事業に携わっている。この“あたりまえ”は世界のどこにいても、変わらない。

上司に  
聞く!



NPO法人 道普請人 理事長 **木村 亮さん**

ウガンダで酒井さんに会ったとき、その熱意とコミュニケーション能力に驚かされました。今も人々のやる気を引き出して確実に成果を上げてくれる酒井さんは、当法人に欠かせない存在。彼女に続くよう協力隊OB・OGたちが、我々の活動に挑戦してくれることを願っています。



この取材が終わったら、ミャンマーへと旅立つという。

## 自分でやるべきことを決める。 だからやりたいことに挑戦できた。

現地では仕事の進め方に対する具体的な指示はなかった。「むしろ好都合でした。挑戦したいことを自由にやれたので…。独自の視点で課題を発見し、次々と解決策を打ち出していった。「現地ではネリカ米を含め、米の栽培が下火になっていました。鳥害や雑草の問題のほかに、根本的な問題があることがわかったんです」。米には水田で栽培する種と畑で栽培する種があり、種が混合されて使われていたのだ。「また、脱穀を人力でしていたので、お米の粒が潰れてしまうという問題も…。これには、眠っていた脱穀機を稼働させて対応した」。

酒井さんが普及促進していたネリカ米

は年に2回収穫ができる。滞在期間中に、その成果を見ることもできた。「ネリカ米で得たお金で養豚をはじめた現地のおばあさんが、嬉しそうに子豚を見せてくれました」。



大豊作! 色づいたネリカ米の中で地元の家家族と記念撮影。



土のうを使って道を整備。ノウハウは現職の木村理事長から直伝されたもの。

## 青年海外協力隊を目指すみなさんへ 現地の人々の暮らしと密着し、 お互いを思いやる気持ちを。

協力隊の活動の良さは、現地の人々と同じ場所に住み、生活をともにできること。そうすることで人々に対して親身にもなれ、相手を思いやる心も育まれます。また、現地の人が自分を思いやってくれたら、お返しをしたくなる。その気持ちが活動への大きな原動力になります。そんなふうに世界のどこにでも、誰かの役に立てるチャンスが転がっているのです。

# 生徒たちが世界に目を向け、 幅広い視野で未来に臨めるように。

**福岡 孝一**  
KOICHI FUKUOKA

赴任地

 **ベリーズ**

赴任地での職種(活動分野)  
**環境教育**

京都市西京区  
**京都市立檜原中学校 教諭**

教鞭を執って7年目、教師としての経験を活かし、青年海外協力隊としてベリーズに赴任。オレンジウォーク町の8つの学校で環境教育に携わる。帰国後、元々勤務していた学校に復職。英語の授業とクラスの担任を務めながら、自らの体験を生徒たちに伝え続けている。

## 赴任期間中も生徒たちに活動を伝え続けて。

京都市立檜原中学校の一角にある階段前掲示板は福岡孝一先生の特別スペースだ。青年海外協力隊としてベリーズで活動していた福岡先生が、同国の位置を示す地図や街の紹介、近隣の国を旅した写真などを賑やかに展示し、生徒たちに紹介している。

「ベリーズに赴任していた2年間は『ベリーズ広報』という通信を定期的に学校に送り、生徒たちに赴任地の様子や活動の近況を伝えていました」。現地での活動中から帰国した現在まで、生徒たちが広い世界に目を向けられるように、発信を続けてきた。

福岡先生が青年海外協力隊としてベリーズに赴任したのは2013年のこと。生徒たちはもちろん、保護者からの信頼が厚い福岡先生にとって、2年間も職場を空けることはかなり大変な決断だった。

「大学を卒業してからずっと“先生”と呼ばれ続けてきた自分を、まったく異なる環境に置くことで経験値を高めたかった、というのが大きな動機です。また、わたしは英語教師ですが、長期の海外生活の経験がありませんでした。できるだけ早い段階でそれを体験することが教師としてのレベルアップにつながると考えたんです」。

## 子供たちはもちろん、 保護者も見据えた教育を。

ベリーズでは日本の学校で教えていた生徒たちと年齢が近い、11~14歳の生徒たちを対象に、環境教育を行った。学校にも、道路にもゴミが溢れている状況を見て、「ただ生徒たちに『ゴミのポイ捨てはいけない』と教えるだけでは効果は表れないだろうな…」と考えた福岡先生は、子供たちに授業の内容を記したプリントを配布することを発案。子供たちがプリントを家に持ち帰り、保護者に授業の内容を話しながらそれを見せることで、保護者の意識も変えていこうというのがその狙いだった。

しばらくして、ある保護者が「うちの子供が家に帰ると、熱心にフクオカ先生の授業についてわたしたちに説明してくれるんです」と教えてくれた。少しずつだが、大きな変化のための第一歩を踏み出せたと感じることができた。



ベリーズや近隣の国を紹介する掲示板。



生徒たちを引き込む授業で定評のある福岡先生。

## 地球の裏側でも 子供たちの心は複雑。

「ベリーズの子供たちも日本の中学生たちと同じく、さまざまな理由から複雑な悩みを抱えています。10代最初の、人生で一番多感な時期ですからね」。協力隊からの帰国後はさらに余裕をもって、生徒たちと接するようになった、と語る福岡先生。

授業の合間に、ベリーズで体験したエピソードを生徒たちに語って聞かせる。「一人でも多くの生徒が世界に目を向けて、視野を広めてくれれば」と願いながら。

上司に  
聞く!



京都市立檜原中学校 校長 **土田 浩**さん

わたしたち教育者の役割は、自らの「良質な体験」を生徒たちに伝えていくことだと思います。福岡先生は近隣の中学校にも招かれ、ベリーズでの体験について講演を行いました。中学生にとって、学校生活は大切な人生経験。福岡先生は生徒たちに、よい刺激をもたらしていると思います。

## 教師としてわかりやすく教え、 隊員として自主的に行動する。

「環境教育の授業では黒板にカラーコピーを貼るなど、視覚教材を積極的に用いました」。ベリーズの授業では黒板への板書が主流だったため、現地の教師たちもこの授業法に関心を持っていたという。

「また、英語のスペリングが正確にできない生徒が多かったので、クロスワードを用いたゲーム形式の授業も行いましたね」。これは日本の授業でも利用していた手法だ。

さらに、バス車内からのゴミのポイ捨て禁止キャンペーンにも尽力。賛同する現地企業からスポンサーを募り、自らデザインしたポイ捨て禁止ステッカーを町中のバスに貼り回った。

「“いいアイデアだ。ぜひ俺のバスにも貼ってくれよ”と運転手さんから声を掛けていただいたことが印象に残っています」と福岡先生は語る。



現地の教え子たちと記念撮影。折り紙を教えたところ大好評だった。



現地の生徒たちの感情表現はとても豊かだ。

## 青年海外協力隊を目指すみなさんへ 予想外の出来事に対する 「対応力」が身につきます。

協力隊員として過ごす2年間を価値あるものにするかどうかは自分次第。わたしはベリーズでの活動で、以前よりも「事前準備」の大切さを認識するようになりました。活動開始当初は何事も上手くいかないもの。いろんな事態を想定して準備することで、対応力を身につけることができたと思います。

# 市民に寄り添い、地域課題を解決するアドバイザーとして奔走。



亀村佳都  
KAZU KAMEMURA

赴任地

 ニカラグア

赴任地での職種(活動分野)  
環境教育

京都市中京区  
京都市 文化市民局 地域自治推進室  
まちづくりアドバイザー

京都大学大学院に在学中、ユネスコ北京事務所  
でインターンを経験。途上国への関心から  
青年海外協力隊の環境教育隊員として  
ニカラグアに赴任する。帰国後、京都市 文化市民局  
地域自治推進室にまちづくりアドバイザーとして  
採用され、現在も伏見区を舞台に活躍中。

## 人々との信頼関係づくりにじっくり時間をかける。

京都市では、11区・3支所をそれぞれ担当する14名の「まちづくりアドバイザー」が活躍している。亀村佳都さんは伏見区の人々との信頼関係づくりに、市民のまちづくり活動支援やイベント、交流会などの取り組みを企画・運営するアドバイザーの1人だ。

青年海外協力隊員としてニカラグアで2年間、環境教育活動を行ってきた亀村さん。「現地では人々とじっくり時間をかけて信頼関係を築いていきました。京都でもさまざまな人々の意見に触れますが、常に“そういう考え方もあるよね”と受け止められるのは、現地での経験が活

きているのだと思います」。

活動の範囲は地産地消PRのため、区役所で野菜や特産物を販売する「区民にぎわいエコ朝市」や料理教室の開催、住民の交流や意見交換の場となるまちづくりカフェの運営など、実に幅広い。

「仕事や家庭で忙しくて、他のことに時間を割けない人々もたくさんいると思います。でも、まちづくり活動への参加は地域や社会を知るきっかけになったり、知り合いが増えたり、自分の暮らすまちに愛着を感じたり…日々の生活が充実すると感じています」。

## たくさんの人の心を動かし、活動の輪を広げる。

できるだけたくさんの人を、活動の輪に取り込んでいく。青年海外協力隊での環境教育活動でも、亀村さんの手腕は存分に発揮された。「子供たちとのゴミのポイ捨て防止キャンペーンでは、現地の各省庁からメディア、店主さんたちと、本当にいろんな人たちに協力をお願いしました。キャンペーン中の警備や車両の使用では、なんと軍隊にまで協力いただいて…」また、赴任期間中に愛知県で開催された「子ども環境サミット2005」に、ニカラグアの児童1人を出席させることも成功。「渡航費と宿泊費以外は自己負担だったので、日本からの寄附を募って、日本での交通費や食費などの滞在費にあてました」。愛知で立派に発表を行い、日本の小学生たちと楽しく交流した児童は、「しっかり働いて、将来はまた日本の友達に会いに行きたい」と言ってくれた。



いつも明るくほらかな亀村さんは職場のムードメーカー。



日々、担当地区の伏見と市役所を忙しく往復する。

## 地域にはまだまだ解決すべき課題がある。

「まちづくりアドバイザーとして思うのは、ニカラグアがさまざまな課題を抱えているのと同じように、京都のまちにも解決すべき多くの課題があるということです」。

観光地、そして京都議定書のまちとして知られる京都だが、福祉、環境、子育て、まちのにぎわいなど、市民が生活する上で感じる課題は多岐に渡る。「だから、まだまだわたしや地域の人々には、やるべきこと、できることがたくさんあるんです」。

上司に聞く!



京都市 文化市民局 地域自治推進室 地域づくり推進課長 松村 憲司さん

亀村さんは実に積極的でバイタリティのある人。その反面、仕事を慎重に進める側面もあり、とても信頼できる人材です。もともと慎重な人だった亀村さんからアグレッシブな行動力を引き出したのは、ニカラグアにおける青年海外協力隊としての活動があったからだといわれています。

## 困難な状況を前にしても自分で解決策を見つけ出すこと。

亀村さんは着任後すぐ、現地の教師たちとともに環境教育のカリキュラムづくりや研修会を行う予定だった。

「着任してすぐに3か月間の教員のストライキが発生。それが終わると「授業の遅れを取り戻さないといけないから」という理由で研修は延期に。実際、途方に暮れました(笑)」。

しかし、亀村さんは決定権を持つ人々に授業計画の重要性を訴え、無事に研修会の開催にこぎつけた。

「『子ども環境サミット2005』へ児童を招くために、パスポートの発行を申請するときも、パスポート専用の紙が在庫切れで発行できない事態を防ぐために、走り

回りました」。

どんな事態にあっても解決策はあると信じ、自分でそれを見つける。現在もその意志で、伏見のまちづくりに挑み続けている。



ゴミのポイ捨て防止キャンペーンで子供たちと。



現地の小学生たちに折り紙などを通じて、日本の文化を伝えた。

青年海外協力隊を目指すみなさんへ

世界中どこにいても、「生活」のペースは同じ。

赴任中の2年間は異文化のなかで暮らすことになりましたが、朝起きて、食べて、仕事して、眠るという生活のペースは世界のどこに行っても基本的に同じ。現地の人々と生活をともにして、たくさんおしゃべりする中で、「人のために何ができるか」を問い続けることが大切です。きっとその経験は一生の宝になると思います。



# 女性が輝く京都の地域支援のため 中小企業診断士としてできることを。



**阪本純子**  
JUNKO SAKAMOTO

赴任地  
 **ケニア**  
赴任地での職種(活動分野)  
**村落開発普及員**

京都市北区  
**中小企業診断士事務所  
京都府中小企業診断協会**

通販会社でアパレルページの企画を担当していたが、夫が青年海外協力隊として海外で活躍していたことに刺激を受け、自らも村落開発普及員としてケニアへ。帰国後、京都府中小企業診断協会に入会、京都のソーシャルビジネス支援事業などに取り組んでいる。

## 生きることに「貪欲」だったケニア女性たち。

阪本純子さんは中小企業診断士として、主に京都の公的支援機関の活動を支えている。さらに、京都府のソーシャルビジネスの支援事業を手掛けるようになって3年。京都府の各地域に暮らす女性たちが抱える雇用や子育てなど、さまざまな課題をビジネスの手法を用いて解決していくのが目的だ。

「青年海外協力隊の活動から帰国して間もなく、自分自身が妊娠・出産を経験したこともあり、誰もが生き生きと暮らしていくことのできる社会づくりに貢献したいと思うようになりました」。

個人事業主や企業などが利益を生みながら、地域の女性たち、そしてすべての人々の充実した暮らしを支援できる持続的なモデルを作り出すこと。そこに中小企業診断士としての阪本さんの手腕が発揮される。

「赴任先のケニアでは、女性たちは『働く』こと、そして『学ぶ』ことにとっても貪欲でした。そんな彼女たちの姿勢が、家事労働から抜け出して地域コミュニティに参加することの原動力になっていたように思います。京都での支援活動でも、地域の女性たちからは同じような外向きのエネルギーを感じることができます」。

## 自分の仕事に誇りを持つ 現地の女性たちを前に。

村落開発普及員として赴任したケニア・マチャコス県では社会開発事務所現地女性たちとともに働いた。「彼女たちは自分の仕事にやりがいを感じ、とても大きな誇りを持っています。しかし、日本のビジネス社会で働いてきたわたしの目から見ると、効率化の面で大きく改善すべきことがあったことも事実です」。

例えば、現地の職員たちは素晴らしいタイピングのスキルを持っているのに、ワープロソフトを単に文書作成の道具としてしか使用しておらず、データの管理がなされていない、エクセルの使い方を誰も知らなかったりする。「つい、上から目線で注意をしてしまい、ケンカになってしまったことも…」。

そこで阪本さんは自分の態度を改め、女性たちへの接し方を変えていった。



中小企業診断士として派遣された支援先からの再指名率も高い。



人々の目線、ベースに合わせて地域に貢献することが信条。

## 相手の目線に立って しなやかに寄り添うこと。

「相手の目線に合わせて考えることの大切さを、この経験から学びました。それからは彼女たちの話をよく聞き、ときには一緒に仕事をサボり、地元のペースに自分を合わせていったんです」。そこからは、人間関係がスムーズになった。

いつも、相手の目線に立ってともに考え、できることをやる。ケニアで培われたこのしなやかな姿勢が、現在の仕事にも大いに活かされているという。

先輩に  
聞く!



京都府中小企業診断協会 代表理事 **山脇 康彦さん**

わたしにもJICAの専門家として中央アジア諸国で働いた経験があり、阪本さんには親しみを持っています。経営支援の高い専門性と、女性ならではの視点を持つ阪本さんは、実に頼もしい存在。あとに続く女性診断士たちの指標として、これからも活躍してほしいと思います。

## 日本のやりかた、流儀を伝える 「代表者」であることの自覚が大切。

ケニアでは社会開発事務所の事務効率化に努めた阪本さん。

「それまで手書きで管理していたデータをエクセルで管理することや、管理したデータを検索する方法を一から説明しました」。



ヤギ飼育グループのモニタリングにて記念撮影。

日本のビジネス社会では常識となっていることだが、職員たちにそうしたスキルが備わっていない。むしろそれがあたりまえに習慣化されている日本社会の代表として、阪本さんはますますやる気を高めていった。

「協力隊員の役目のひとつは、自分の活動から日本のやりかた・流儀をよく知ってもらいたいと思います」。日本人の生産性の高さの裏付けとなっている整理整頓の意識やサービスの在り方、礼儀などを伝えたことは、現地の職員たちにも刺激を与えたのではないかと阪本さんは振り返る。



地元産バッグの販路開拓、品質改善に尽力した。

**青年海外協力隊を目指すみなさんへ**  
柔軟な適応力を心がけ、  
何事も明るく、  
プラス思考を心がけて。

特殊な専門性を持っていないでも、日本で社会人として培った経験は必ず現地でも役立ちます。自分が「日本人の仕事」を紹介する、そんな気持ちが必要です。また、何事にも柔軟に対応できる適応力を持つことで、現地の人々との距離は近くなります。明るく、プラス思考で活動に取り組んでください。

# 高齢者のみなさんがいつまでも 元気に暮らせる亀岡を目指して。



吉田 司  
TSUKASA YOSHIDA

赴任地  
ブータン

赴任地での職種(活動分野)  
体育

京都府亀岡市  
亀岡市 健康福祉部  
高齢福祉課

視覚障がい者の生活支援・職業訓練施設で  
体育指導に携わっていた経験を活かし、ブータンの  
視覚障がい児のための学校で体育教師として  
活躍。帰国後、京都府立医科大学に  
勤務したのち、亀岡市に採用。  
地域の介護予防に取り組んでいる。

## 高齢化社会が抱える課題の根本に迫る。

高齢化が進むなか、要介護者の増加は国全体が抱える大きな課題となっている。この状況を受け、亀岡市が大学などの研究機関、京都府、栄養士会、歯科衛生士会とともに総合型介護予防プログラムの開発を進めている。吉田司さんは亀岡市 健康福祉部の高齢福祉課で、健康運動指導士として活躍している。

「総合型介護予防プログラム」では長期的な視点に立ち、高齢者の方々が将来的に介護保険サービスを使わずに健康に暮らせるよう、認知症予防や筋力の維持・改善のためのトレーニングを中心とした教

室を開催しています」。さらに吉田さんの役割は、ずっと先を見据えたところにあった。「トレーニングや健康指導を受けられた方一人ひとりが、その後の生活で介護保険サービスを受けずに暮らせるよう健康を維持できているか?健康運動指導が実際に成果を見せているか?…そうしたデータの集積・分析を行うことで、結果をプログラムに反映させ、取り組みをますます充実したものにしていくことが今のわたしの役割です」。

亀岡市内はもちろん、日本全体が抱える高齢化社会の根本的な課題解決に向け、吉田さんは地道な努力を続けている。

## その熱意と行動力は国王の心にも響いた。

青年海外協力隊では、ブータンで唯一の視覚障がい児のための学校に、体育教師として赴任した。一般的な体育指導のほか、障がい者スポーツも定着させたいという意図のもと、サウンドテーブルテニスやフロアバレーボール、ゴールボールなどの指導も行う。「サウンドテーブルテニスというのは、視覚障がい者向けに考えられた卓球で、専用の用具が必要です。ブータンでは、元々あった卓球台に手を加えて生徒がサウンドテーブルテニスを楽しめるよう工夫しました」。

赴任中、予定されていた体育館建設が行われないというトラブルにも見舞われたが、学校の礼拝堂を練習場に使うなど、試行錯誤を繰り返した吉田さん。また他の教員とともに生徒を引率したバンコクスタディツアーでは、生徒の熱中症対策などに奔走し、熱意と行動力で生徒を支えた。その活動はブータン国王の耳にも入り、スタディツアー後に接見、「わたしの子供たち(生徒)を助けてくれてありがとう」と、感謝のお言葉をいただいた。



膨大なデータを分析・解析して未来に活かすのが吉田さんの役割。



笑顔を絶やさない吉田さん。  
しかし、自分の使命を語るときは表情が引きしまる。

## 達成感が得られなかったこと。 その反省を今に活かす。

「ただ、赴任期間中に何かを成し遂げた、という達成感を十分に得られなかったことも事実です」と、吉田さんは振り返る。「いま、取り組んでいるのは、これから高齢化が予測される諸外国にとってもモデルとなる事業。亀岡市役所には膨大なデータがありますが、これらを組み合わせて人々の健康のために役立てていくことが目下の目標です」。その思いで、一歩ずつ“達成”への道を歩み続けている。

上司に  
聞く!



亀岡市 健康福祉部 高齢福祉課 課長 小栗 真人さん

わたしたちの事業はさまざまな部署や職種の人々との連携が重要ですが、誰とでもすぐに打ち解けられるコミュニケーション能力と行動力が、吉田さんの強み。今後も青年海外協力隊で培った豊富な経験を活かし、質の高い介護予防事業の実現に向けて取り組んでくれることを期待しています。

## 生徒たちと同じ言葉で話し、近づく。 そして人々の温かい心に触れる。

吉田さんの赴任先は東ブータンのタシガン県にあるカリンという小さな町。

「ブータンの公用語は“ゾンカ”という言語なのですが、東ブータンでは“シャショップ”という言語が用いられています。生徒たちとコミュニケーションを行うためにこの言語を赴任中に独学で学び、マスターしました」。体育館がなく、道具もなく、一緒に活動していた現地職員は途中で産休に入ってしまった。孤立奮闘を強いられた吉田さんだったが、支えになったのは現地の人々の温かな心遣いだった。「ちょうど赴任期間中に東日本大震災が発生したのですが、多くの人々が心から心配してくれました。そして震災の犠牲者

のために祈りを捧げてくれたんです」。



民族衣装の学校制服を着た現地の教え子たちと一緒に。



現地で日常的に使われる方言で  
生徒たちに語りかけた。

## 青年海外協力隊を目指すみなさんへ 「日本人の良さ」を示す 代表としての誇りを持って。

日本人は一般的に強い宗教観を持たないことから、異文化に溶け込みやすいという利点があります。また、日本人特有の勤勉さ、誠実さ、礼儀正しさといった「日本独特の良さ」を活かすことを、途上国の人々は求めています。「自分は日本人の代表だ」という誇りを持って活動に取り組んでください。